

## 「経験が持つ力の限界」

日本赤十字社 参与 三井 俊介

練馬区民、同在勤・在学の皆さんは、令和3年の幕開けをどのように迎えられたでしょうか。(NPO法人)練馬区水泳連盟(以下、練水練)会員の一人である私は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を色々な場面で受けてきた令和2年の延長線上にある令和3年初めと感じます。昨年12月1日には、令和2年の新語・流行語大賞が「3密」と決まり、ノミネートされた流行語の多くはコロナ禍関連だったそうです。

9か月程前の昨令和2年4月15日、私が尊敬する練水練の前会長/上野定男氏が鬼籍に入りました。コロナ禍にあったとはいえ、きちんとご冥福を祈ることもご家族にお悔やみも申しあげられずに時間を経てしまいました。心底からご冥福を祈り、お悔やみを申しあげます。故人から一年前に頂戴した令和2年正月の年賀状には、東京五輪・パラリンピックの感動を味わえそう・67年間の運転歴に終止符を打った・92歳になるが、光が丘公園での早朝散策3千歩は続ける。などの記載がありました。私にとっては、文字通り「巨星墜つ!」でした。

さて、毎年9月の恒例となっている青梅市を流れる多摩川での「河川研修」、いくつかの事情で昨年は実施ができませんでした。2～3時間程の研修終了時に、私から参加の皆さんに対して次のようなお願いをすることがあります。「きょうの体験を今後も繰り返し、さらに書籍等を読んで学びを重ね、ブラッシュアップし、経験という確固とした力にしてください」と。ここでの体験を磨いて経験に進化させ、川の優しさと怖さを認識し、豊かな人生実現の一助にしてもらえれば考えるからです。

しかし、最近この考えを補強しなくてはならないと思うようになりました。

その起点になったのは、東北大学災害科学国際研究所長の今村文彦教授が「河川」2017年8月号巻頭言【(公社)日本河川協会】に記した記事が一つ、もう一つはプロ登山家の竹内洋岳氏

が「スポーツ・ジャパン」2020年9～10月号巻頭コラム【(公財)日本スポーツ協会】に記した記事です。少し長くなりますが、それぞれの該当箇所を抜粋(原文)します。

まず、今村氏の記事です。「防災では、安心と安全が矛盾することがある。防潮堤などの建設により住民が安心と思っていたために避難が遅れ被災する場合である。～中略～明治三陸地震三陸津波の記事で[経験者多く死す]というものがあるが、これも経験から認識していた危険性の水準と現実の水準(津波の規模)にギャップがあったということだろう。～中略～住民の主観的な安全性の理解と現実の客観的な安全性を近づけるためには、現在判明されているまたは推定されているリスクの他、不確定性の中にある残余リスクを示していくことも必要であろう。」

続いて竹内氏のコラムから、「登山は想像のスポーツです。すべての山が未踏峰の時代、どんなルートで、いかなる装備をし、誰となら登れるのか～まさに想像で成り立っていました。そして、実際にめざし、経験する。ただし経験を積んではいけない、僕はそう思っています。登山で前回と同じはあり得ず、経験に頼るのがいかに危険か。人は経験を積みたがりますが、それが逆に身を危険にさらすことにもなる。だから僕は経験を並べ、足りない部分を想像する。死のイメージすら描き、ゆえに回避もできる。」

私からみて「その道を極めた」お二人の文章に触れて、もっと勉強をして複数の考え方を知り、広い視野を持つことの必要性に触れた気がします。

経験が大きな力にはなることに間違いはありませんが、絶対ではないのだということですね。

